

夢野久作『瓶詰地獄』における「地獄」

——語りからみえるもの——

一 はじめに

夢野久作の『瓶詰地獄』は、一九二八年十月に『瓶詰の地獄』として雑誌『獵奇』に発表された。その後、一九二九年には『日本探偵小説全集 第十一篇 夢野久作集』（改造社）に収録され、その際に久作がルビを振る等の手を加え改稿した。一九三三年には、単行本として出版されその際に『瓶詰の地獄』から『瓶詰地獄』にタイトルを改めている。成立の背景として、久作は博多湾で漂流瓶を拾う体験をしており、それが本作の題材となっていると考えられる。

『瓶詰地獄』は短編でありながら夢野久作屈指の作品として評価が高く、久作と同時代作家の天下宇陀児は「作品の構成そのものがトリック」、「読みかえして驚きを新たにした」と称賛し、『瓶詰地獄』を君の最高作品だぞといったらどんな顔をするのだらう。」と述べている。

まず『瓶詰地獄』が書簡の形式を取り、第一の瓶から第三の瓶

岩 沢 一 輝

までが並行に示されたテクストであることを確認しておく。全てが封瓶であるために、開けられた時期は全て同じでありながら、しかし日付等の記載がないことから、時系列により構成の正確性を示すのは困難である。よって『瓶詰地獄』を正確に物語化するのとは不可能であり、その読解はあくまで読者の一解釈に過ぎず、書簡の間に存在する時間を読者が想像するしかないことが特徴としてあげられる。^①村上菜以はこの物語の決定不可能性を、書簡における書記能力から考察している。^②『瓶詰地獄』を構成する書簡について、作中で振られているルビの問題から、無人島に漂流している太郎とアヤ子は聖書による文字の獲得は不可能である。その書記能力の否定によって、書簡の存在が物語の決定不可能性に与するものである。そして物語の決定不可能性により、読み手である他者に再構築されることにより生まれる『瓶詰地獄』の物語の不在を論じている。^③山根祥子によって物語の不在に関しては、『瓶詰地獄』において瓶が投げ込まれた事実から、その瓶を投げ込む行動の観点より精査されている。また、それら瓶に内包され

ている書簡とは対照的な、海洋研究所宛ての書簡について触れられている^③。つまり、物語を決定づける要因の「不在」があるゆえに、物語の決定不可能性の存在が複数の先行論で述べられているということだ。

他者による物語性の再構築については、小金沢透に書簡の配列そのものに着目した論があり、作中の兄妹が自己の中で培い想像した外部を、内部にある外部すなわち「内部内外部」ととらえている。そのうえで、書簡における配列の〈ずれ〉が結果として、兄妹という書簡の書き手の意思を離れ、『瓶詰地獄』という名のテクストを構成する要因として、外部で機能するとしている。また小金沢によって、前述の『瓶詰地獄』における物語の決定不可能性を生む解釈の多義は、この配列の〈ずれ〉により発生し、読み手自身が別の配列者として、巻き込まれる形で〈ずれ〉に関わるため存在することが挙げられている。そして重要な点として『瓶詰地獄』^④には、その〈ずれ〉を生む語り手がいることが述べられている。

ここまで『瓶詰地獄』の物語の決定不可能性とそれを構成する要因について触れたが、当然作中の書簡の中身について精査しなければならぬ。大島梢は『瓶詰地獄』に取り入れられている聖書の役割について精査し、実際に使われている聖書を確認している。書簡の順序を検証した上で、その後、聖書をもとに作中の「太郎」と「アヤ子」の性質について論じている。書簡を残すに至るまでの過程の中で、変質した「太郎」と「アヤ子」の性質を捉え、またその変質した性質を、無人島にいる彼らにとって全て

の根底にあたる聖書の枠組みにあてはめている^⑤。

伊藤里和は『瓶詰地獄』に対しあえて思想性を見出し、社会的要素を探ろうとする。『瓶詰地獄』が執筆された一九二〇年代から三〇年初頭にかけてマルクス主義の最盛期であることなどを念頭に、社会主義思想の隆盛する中、『瓶詰地獄』について、形式や題材のみが目立つのではなく、潜在的特徴としてマルクス主義や社会主義の影響を受けた近代文学のあるべき姿を模索することの可能性が提示されている^⑥。

以上のように『瓶詰地獄』には、物語の決定不可能性があることは確認できる。そして、それらが生まれる要因として、物語を決定づけるものの「不在」が挙げられた。決定が不可能である以上、『瓶詰地獄』に対する考察は、海洋研究所と瓶の中身である書簡に捉われており、その枠組みの内部で作品を解釈するうちは当然、解釈者自身も一読み手として物語を再構成しているにすぎない。しかしながら、全てを物語の決定不可能性として論じ、結論とするのは解釈の停滞ではないだろうか。したがって、本稿においては、作中から様々な要素をとりだし、それをもとに、書簡に記されている人物たちの行動を精査し考察を展開していく。

また語り手についても触れる。「見えない語り手」を起点としながら、同じく物語の決定不可能性を有する芥川龍之介の『藪の中』（一九二二年）を参照しながら「語り」について比較していく。そのような語り手の存在を確認したのち、彼らの行動とそれによって及ぼされる効果についても触れ、そこから見えてくる『瓶詰地獄』の無人島の外、真の「外部」であるものが持つ社会

性についても、論じていくこととする。

二 『瓶詰地獄』における聖書の役割

さて、本論に入る前に、『瓶詰地獄』には、聖書、神話の体現など論点となる要素が複数存在することを確認しておく。

最初に『瓶詰地獄』を語る上で、見逃せない存在として聖書の存在が挙げられる。

これまでの『瓶詰地獄』研究の中で「第三の瓶」の書簡をカタカナで書いた市川太郎、アヤ子⁷が、聖書により、「第二の瓶」、「第一の瓶」で漢字及び比喩表現を含めた文字獲得を行なっているとされている。前述のようにこの聖書による文字の獲得はルビの問題上不可能であると指摘されているが⁸その確定は物語の決定不可能性につながるためここでは考慮しない。重要なのはすでに書簡が書かれていることにある。

そして、聖書が太郎とアヤ子、彼らの生の基準として明確に存在している点が挙げられる。

聖書を、神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思つて、ムシメガネや、ビール瓶よりもズット大切に⁹して、岩の穴の一番高い高い棚の上¹⁰に上げて置きました。『瓶詰地獄』
本文引用)

聖書の全てが、彼らにとつての判断基準であり、倫理観を教える親のような役割すら果たすものとして設定されている。しかしながら、「第二の瓶」において太郎は、その聖書を燃やすことになる。

小舎の中へ駆け込みますと、詩篇の処を開いてあつた聖書を取り上げて、ウミガメの卵を焼いた火の残りの上に載せ、上から枯れ草を投げかけて焰を吹き立てました。『瓶詰地獄』
本文引用)

この聖書を燃やすという行為の意味は何であるだろうか。

彼らが求めているのは絶対的な法権力としての神ではなく、インセスタブーの罪悪感に対して、「み休徴^{しるし}」「お示し^{しめし}」といった、目に見える物質的な恩寵で応えてくれる神なのである。だが、恩寵は与えられない¹¹。

もし聖書が秩序であつたならば、聖書が燃やされた時から近親相姦は許されることになる¹²。

つまるところ、聖書（この場合はそれに付属する神）が彼らに對し充分な恩寵を与えず、さらに言えば太郎自身が抱いた相姦の劣情をも罰することのないゆえに、燃やしたと考えることができる。聖書を燃やすことは、そこに内在する信仰から外れ、自身を罪の対象から除外する効果を持つ。近親相姦を罪とする概念にとられなければ、そこに対して背徳感を抱く必要性はないのだ。つまり罪を犯してもいいという環境が生まれているのである。

しかしながら重要なのは、太郎は結局のところ罪意識から逃れることはできない点にある。

それは、おほかた、私が聖書を焼いた罰なのでせう。夜になると星の光や、浪の音や、虫の声、風の葉ずれや、木の実の落ちる音が、一ツ／＼に聖書の言葉を呟やきながら、私たち二人を取り巻いて、一步一步と近づいて来るやうに思はれる

のでした。〔『瓶詰地獄』 本文引用〕

このように聖書を燃やすことで、かえって罪意識を感じ、周りのものからすら聖書の言葉を感じ取るようになってしまふ。

では、聖書を燃やしたはずの太郎は、なぜ罪の意識を感じ続けたのか。また、これまでの研究で指摘されるように「第二の瓶」（第三の書簡）よりも時系列では後にある「第一の瓶」の中で、なぜ彼らは自殺を行うに至ったか、ここに大きな問題点が生まれてくる。これらを見るには実際に、「第一の瓶」の本文から見る方が良いだらう。

私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い崖の上に登つて、お父様、お母様や、救ひに来て下さる水夫さん達によく見えるやうに、シツカリと抱き合つたまゝ、深い淵の中に身を投げて死にます。〔『瓶詰地獄』 本文引用〕

ここでの注目点は、彼らの死は迎えに来た外部社会の人間の目に付くように、行われている点である。

二人を突き落とすのは約十年という歲月培われた聖書による道德観念ではなく、二人の内面で育てられた外部への空想（内部内外部の社会）の視線である。¹⁰⁾

つまり彼らに罪を感じさせる要因は、外部社会にこそある。正確に言えば彼らは本当の外部社会を知らないため、自身らで想像した外部社会、つまり「内部内外部」とでもいうべきものから責められている。聖書を燃やすことでかえって外部に聖書の役割が転嫁され、規範が内面化しているのだ。外部に役割が転嫁する以上、もともと彼らの中で、神と外部は本質的には同義であるとい

える。恩寵を与えない神に対して聖書を燃やしたと前述したが、それは同じように救いに来ない外部⇨恩寵を与えない神と同義であると捉えることができよう。また仮に聖書を燃やしたとしても、まだ外部規範という想像がある以上彼らの罪意識は解消されない。

その絶頂に立つて居りましたら棒切れと、其尖端に結びつけてあるヤシの枯れ葉を、一思いに引きたふして、眼の下はるかの淵に投げ込んでしまひました。

「もう大丈夫だ。かうして置けば、救ひの船が来ても通り過ぎて行くだらう。」〔『瓶詰地獄』 本文引用〕

このような太郎が行動から、近親相姦を禁忌だとする意識はここで明確に外部へと向けられているがわかる。先の、恩寵⇨外部からの救いの構図をもとにすると、ここに恩寵を与える神（ならば総じて罰を与えることもできる神）の罰と外部からの救いによって露呈する近親相姦の罰は同じ性質を持つている。

ただし、この外部はあくまでも、太郎らが想像した外部である点に留意すべきである。

「××島村役場」より宛てられた手紙に明らかなように、兄妹の空想とは別にある社会（内部外外部の社会）が表出してゐる。¹¹⁾

事実、彼らが悩み想像し彼らの罪を咎める外部社会は彼らの中でのみ存在しているといえる。対して本当の外部社会を代表する「××村役場」は瓶を「海洋研究所」に送るものの一つとしか見えていないように描写されており、そこには兄妹が過ごし、地獄で

あると綴った書簡の中身への関心はうかがえない。そして何より、自らが規定した外部社会に囚われ、自己を罰する彼らに終着はなく、「第二の瓶」の「此美しい、楽しい島はもうスッカリ地獄です。」とあるように終わりのない罪の意識がまるで地獄のように延々と続くのである。聖書を燃やしたことにより、この外部による抑圧は内面化され、かえって彼らを苦しめることになる。このユートピアは人間の意思決定次第でディストピアにも変わりうる可能性を有している¹³。

このようにして『瓶詰地獄』の作中で「太郎」が述べる「地獄」は生まれているのだ。

ここまでを踏まえた上で、『瓶詰地獄』の根底として、触れなければいけないのは、本作が書簡体形式である点だ。第一から第三までの瓶にはそれぞれに明確な目的が存在する。山根祥子は、書簡の中身について救助要請、懺悔、遺書としての生きた証としてそれぞれ別の性格を有するものと結論付けている。

Aの瓶（第三の瓶）の内容は助けを求めた、両親宛てのもの。Bの瓶（第二の瓶）は自らの罪を告白した、神に宛てたもの。Cの瓶（第一の瓶）は自分たちの生きた証として、自分たち以外の第三者に宛てたもの¹⁴。内の記述は引用者による。

その上で

遺書は基本的には自分たちの死後のために残すものである。それを読む人の存在を意識しなければ恐らく書かないだろう。たとえ両親に直接届かなくとも、それを見つけた第三者

にとつて開封され、自分たちのことを知ってもらえる可能性はある¹⁵。

このように、最後の「第一の瓶」は二人が外部に対して自身らを認識してもらうために書いたとしている。

では、ここにある外部とは、作品内で存在する「海洋研究所」など無人島の外という意味での、外部であろうか。事実、瓶は村役場から海洋研究所に届けられ外の人間が彼らを認識することは間違っていないだろう。しかし、書簡の書き手たる彼らは、前述したように本当の外部を認識していない。全ては彼らの想像による外部でしかなく、またその外部も自身らに罰を与える存在としてのみ描かれている。そのような人物達に宛て遺書を残すだろうか。自己の罪を認め自殺する人間達が、自身らを認識してもらう必要は、その外部世界に対しては必要ないはずである。つまりここでの、遺書を書いた理由は外部に対して自身を認識してもらうのではなく、自身らの行動を書簡という形で再精査し、認識し直しているのではないだろうか。自身らが犯した罪を既に知っていると考えられる人達（既に知っているとするのはあくまで兄妹の想像ではあるが）に伝える必要はない。ならばここでの認識は自己の認識かつ、それ以降の行動についての重要性を示唆するため存在していると読むべきだろう。この遺書執筆以降の行動とは当然のことながら、「自殺」である。

少し話は前後するが、先に本作の重要点として「聖書」を挙げたが、『瓶詰地獄』には大きな要素として旧約聖書創世記の آدمとイブの再現が見られる。

そのうちに島の東に在る岬と磐の間から、キレイな泉が、潮を引いた時だけ湧いてゐるのを見付けましたから、其近くの砂浜の岩の間に、壊れたボートで小舎を作つて、柔らかない枯れ草を集めて、アヤ子と二人で寝られるやうにしました。

『瓶詰地獄』 本文引用

二人が認知する世界に二人きりの男女という共通点が存在し、これまでの研究においても「この無人島はエデンであり、ボートの小舎はエデンの園を暗示していると考えられる。世界に二人きりの男と女という点でも同じである。」と指摘されており、さらに禁断の果実を食べ神の教えに背いたアダムとイブと同じように彼らも教えに背いている。アダムとイブの再現は、男女二人という視点から、聖書で禁止されている近親相姦を想起させる。そして彼らも聖書に忠実であつたからこそ、自身の罪に大きく苛まれているのである。大島梢は、この再現性を踏まえたうえで、それぞれが別の「個」を獲得することで更にアダムとイブの再現に近づいているとしている。

同じ聖書を読んでいる、どの教えを重視しているかに大きな違いが見られた。ふたりは自分たちが一つのものと思つているが、実際はすでに分離しており、別の「個」となつてゐるのだ。(中略)アダムとイブは元々同質の一つのものであつた。それが二つの別々の個となり、神によって両者別のアイデンティティを与えられた。太郎とアヤ子は無人島という閉鎖空間の中で、全く同じ環境・同じ教育を得、接触を持つことのできる他人はお互いだけであつた。(中略)無人島

に漂流した時には同一のものであつたはずの彼らのアイデンティティは、成長と共に別のものとなり、それぞれが「個」を確立している。男女を異質として教える聖書と同じ道筋を二人は歩んでいる¹⁷。

また、その「個」の獲得として、「第一の瓶」では外部世界を氣にしており「第二の瓶」では神を氣にしている点を、精神性や思考の相違とし、「第一の瓶」の書き手をアヤ子と仮定している。「第一の瓶」には、書き手の明記がないが、聖書の女性是自己主張をすべきではないという教えを守るために明記していないとし、書き手がアヤ子であると論証している。つまり、無人島という樂園で暮らした二人はアダムとイブとして神話性を体現し、聖書との同一化を生んでいるのである。

三 『瓶詰地獄』における書簡内の地獄

さて、ここまでを踏まえ『瓶詰地獄』における「瓶」に内包されている書簡より、「太郎」と「アヤ子」二人の性質について、さらなる考察に繋げていく。

私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い崖の上に登つて、お父様、お母様や、救ひに来て下さる水夫さん達によく見えるやうに、シッカリと抱き合つたまゞ、深い淵の中に身を投げて死にます。(『瓶詰地獄』本文引用)

この自殺にはどのような意味があるうか。前述したように自殺は、それ単体では贖罪の意味を待ち合わせよう。またそれを書簡で記すまでは自己確認の一環であるといえる。しかし瓶に詰め流

す行為は、彼らにとって何の意味も持たないはずだ。本論において、この自殺は人間性を取り戻すための行為であると考える。ここで述べる人間性とは、聖書による神話性に属さず、あくまで人間として主体がその個人、人間に存在すること、言い換えれば聖書に囚われず自己決定性をもつことにある。

「個」の確立や元々の性質の違いがあるにも関わらず、本人たちがそこに無自覚であるということが、①と②の手紙の間にある矛盾や違和感の正体なのだ。

アダムとイブの体現として太郎とアヤ子は聖書に沿って生きている。しかし彼らはそれに対して無自覚である。自身がアダムとイブの体現だと考えることは一切できない。そして無自覚だからこそ、彼らは自身に罰を欲するのだ。

アダムとイブは神に背いた罰として、エデンの園を追放され、エデンに暮らすこととなる。これが、所謂楽園追放である。太郎とアヤ子は聖書を燃やしたことにより、同時に、小舎を失ってしまう。これが二人にとっての楽園追放であり、無人島（での生活）は天国から地獄のように変化してしまう。¹⁹

聖書のアダムとイブは、エデンの園を追放されることが彼らへの罰となり、その時点で人間としての原罪と罰を背負う。人間の原罪としての罰とは、女には子孫繁栄のための出産の苦しみと男の支配を与え、男には地から苦しんで食物を得る等が挙げられる。そしてこれらの罰の中には「死」が含まれている。新約聖書の『ローマの信徒への手紙』の中では、具体的に触れられてお

り、アダムの罪により人間に「死」が与えられたとされている。つまり「死」は罪に対する罰であり、当然それらを付与した神によって行われる行為である。聖書においてアダムは九三〇歳まで生きたとされている。すなわち直後に死が訪れたわけではなく、その後にも長い生が存在していた。そしてその生の間に特に罰を恐れていた描写は聖書にはない。しかし聖書を燃やした太郎とアヤ子は小舎を失い、エデンの園を失いながらも未だに罰を恐れている。そして自身らが死ぬこと、すなわち自殺することで罰を得ようとしている。罰を求め続ける姿勢、ここから彼らは当初あった神話性から徐々に乖離する。そのためアダムとイブとは違う、その完璧な体現者とみなすことができないのだ。聖書によってすべての規範が与えられた彼らにとって、その姿勢の違いは聖書との乖離に繋がる。その結果、彼らにとって、神のみが扱うことのできる「死」という概念を、彼らが自由に自らに付与できる。彼らは罰を恐れ続けることで、一見、聖書すなわち神に囚われているように見えるが、先に述べたよう罰として与えられる「死」を自ら付与することは神の行いを篡奪する行為である。通常、聖書に囚われていればあり得ないことである。彼らは聖書を燃やすことで聖書から逸脱しようとするが罰の恐れから一度聖書に回帰してしまう。しかし、その際の「死」を求める姿勢や「第一の瓶」で自死を選ぶことなど複数の観点を起点にすれば、神の行いを篡奪するところまで聖書から外れていたと読むことができる。彼らは、一部聖書に依りながらも徐々に逸脱し、神に囚われていない状況に近づきつつあるといえる。

聖書を通して神への信仰を持ち続けている限り、彼が自殺という手段を取ることはできないのだ。²⁰⁾

つまり聖書を用いて神に縛られている内は、自身に「死」をもたらすことは不可能である。ただ徐々に聖書から外れていく彼らにとって、自死という選択はありえることになる。

ではなぜ彼らは自死を実行したのだろうか。一見、罰を求める姿勢の延長であるようにも見受けられるが、前述のように、それは罰を与える対象（神）の行いを篡奪する行為である。しかし結果として自死を行えば聖書から外れ、自身らを罰するものもなくなり自死をする必要もなくなるはずである。

それは、太郎らが人間性を取り戻す考えを得たことによるからではないか。彼らのアダムとイブの体現は完璧ではなかった。無自覚に最後まで罰を求め続ける姿勢は聖書との大きな乖離である。しかし無自覚ではあるが、アダムとイブとしての「個」の確立を半ばまで体現した彼らに果たして自己決定はあっただろうか。聖書という敷かれたレールの上を環境的な要因や神という概念に規定され、なぞっているだけに過ぎないのではないか。聖書に縛られている以上、そこに自己決定は存在しない。そして彼らはそれを当然の事象として受け入れてきた。だが「第二の瓶」で聖書を燃やしたことで自身らを規定する存在は一度消失する。聖書を離れ、それまでの規範意識に終止符を打つことで徐々に敷かれたレールから乖離していくのだ。そしてその乖離は時間が経つにつれ次第に大きくなる。その結果が、「第一の瓶」での舟の幻影を見る行為につながるのだ。舟の幻影を見ることは、すなわち

外部社会に対して、明確に目を向けていることを示し、それまで内部世界のみであったものから外れていくということだ。

第一の瓶がまず漂着しそれによって救出船が来たのではないなら、この第三の瓶の手紙の中の記述は、もともとありえないのである。そうであるとすれば、この絶海の孤島の兄妹相姦悲劇は、実は、兄妹の脳髓のなかの幻影がもたらした悲劇ということになりかねない（中略）「瓶詰の地獄」の太郎とアヤコは、創世の相姦者となる徹底的な白紙還元の一歩手前で、幻影の社会に引き戻され、それゆえに脳髓地獄に落ち、それゆえに死を選ぶのである。²¹⁾

つまり彼らが目撃した舟は、幻影であるが、由良君代によって救いの船は幻想の産物かもしれない。あるいは本物の船であったのかも知れない。（中略）幻想であろうとなかろうと、兄妹ははつきりと船を見たのである。²²⁾

とされているように、彼らが明確に外部に目を向けていることが認められる。

内部世界から外れていく過程で彼らは、人間性を取り戻すという考えを得て、結果、書簡にして瓶に詰める。そして神のみが自由に扱うことのできる概念である「死」を、自らにもたらすことにより神に囚われないとする、大きな決別を図った。無論、そこで聖書によって生み出された「地獄」にも囚われないことになる。「瓶詰地獄」の太郎とアヤコは人間性を取り戻そうとしたのだ。先にも述べたが、ここにおける人間性とは即ち聖書にのみ囚われているわけではない、主体性を個人、人間が有する、ある種

の自己決定を指す。それまで聖書を基準とし、全てがそれによる教育のもとに成長した彼らには、疑う余地なく聖書は絶対的な規範であった。しかし、聖書を燃やすことにより、「内部内外部」を意識することで、その聖書に疑問を抱く余地が生まれた。つまり彼らの「死」は、抱かれた疑問から自身の立ち位置を再確認した上で、取られた行動と言える。一見すると、「内部内外部」という規定に殺された彼らに見えるが、「内部内外部」はそもそもが、自身の考えの反映であるために、（もとに聖書があるとはいへ）自己の発想という意味で人間性、自己決定と言っている。だろう。

さてここまで「太郎」と「アヤ子」の目的について考察してきたが、しかし彼らは本当にそれによって人間性を獲得したのだろうか。前述と矛盾するようであるが、結果として彼らはやはり人間性を外れ、神話性を手に入れる状況を作り出してしまったと考えられる。

前述では彼らが人間性を取り戻そうとした過程の中で、「死」を選び、その結論を出すうえでアダムとイブにはない、以降も罰を求め続けることをあげた。そしてアダムとイブを体現した彼らが、聖書を燃やすことでそれまで定められていた規範が消失し、自己を規定していたものから徐々に乖離していくとした。

当然ながら、この乖離とは太郎らが罪を求める意識を持ち続ければ持ち続けるほど大きくなる。乖離が大きくなるとは、自身がそれまで歩んでいたルールを客観視する機会を得ることができたということだ。「死」によって獲得される人間性は、神話性から

逸脱するために存在する。ルールから大きく乖離し、「第一の瓶」で船の幻影を見ることで人間社会に向けた意識が成立する。しかしながら、そのように人間社会を意識する状況に置かれたとして、彼らがそこに存在することが可能であるかと問われれば、そうではないと答えざるを得ない。「太郎」と「アヤ子」の二人は、やはりアダムとイブの体現として存在してしまっているのではない。

聖書を通して神への信仰を持ち続けている限り、彼が自殺という手段を取ることはできないのだ²³。

「瓶詰の地獄」の太郎とアヤコは、創世の相姦者となる徹底的な白紙還元の一歩手前で、幻影の社会に引き戻され、それゆえに脳髓地獄におち、それゆえに死を選ぶのである²³。

先に『瓶詰地獄』において、二人は「死」を実行することにより、神のみが扱える「死」から逸脱し、神との決別を図ったとした。神と決別した以上、聖書によって生み出された「地獄」にも囚われないはずである。自身らがそれまでいたルールを客観視したことを踏まえれば、またそのルールに戻らないように聖書の禁忌行為が行われているといえる。

理論上はそうであると仮定した。ここで見るべきは、それをもとに行動した彼らは本当に「死」によって聖書と神から離れることができたかどうかだ。

端的に言ってしまうと、彼らが死ぬことは二人が無人島から「外」に出ることである。すなわちこれは、アダムとイブのエデ

ンの園追放と同義に考えることはできないだろうか。前述において、太郎達の想像である「内部内外部」は、神と同じものであるとした。ならば、彼らが「第一の瓶」で見た船の幻影は、幻影という形で彼らの内部に存在する「内部内外部」を最も色濃く示している。神Ⅱ内部内外部として、即ち罰を与える存在によって「死」を選ぶことで島の「外部」に出たのである。これらは、まさしくアダムとイブの追放と同じ状況であるといえるのではないだろうか。

アダムとイブは神に背いた罰として、エデンの園を追放され、エデンに暮らすこととなる。これが、所謂楽園追放である。太郎とアヤ子は聖書を燃やしたことにより、同時に、小舎を失ってしまう。これが二人にとつての楽園追放であり、無人島（での生活）は天国から地獄のように変化してしま⁽²⁵⁾う。

このような意見もあるが、実質的に彼らが罰を受けた後も罪意識に悩まされている点で、本当のエデンの園追放にあたる罰は、彼らの中で執行されていない。

「死」によって、結果としてそれ以降罰を求めないという形も含め、この瞬間に最もアダムとイブを体現したといえる、ある種の皮肉がここに生まれているのだ。

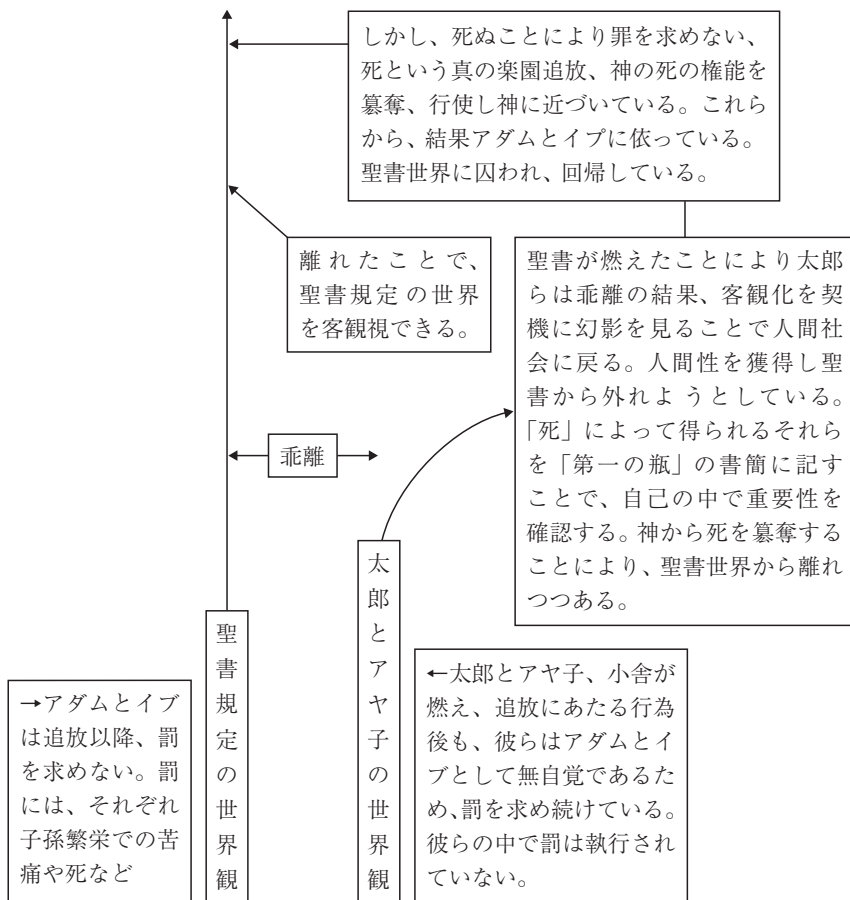
アダムとイブの体現という結論の中で、彼らが人間性を取り戻すという過程は一見不要に思われる。多くの先行研究では、聖書を燃やすことで聖書世界の神話性が内在化され、彼らは、神に接近してゆくと読まれている。あるいは、最終的にはアダムとイブ

を体現することで、むしろ最初から神話に拠っているのではないかと考えることもできよう。神に近づいたために、神のみが付与できる死という権能を自分自身に与えた結果、彼らは自殺したともいえる。

しかし本論では彼らが人間性を得ようとする過程を経ることが重要と考える。先に述べた過程で考えた場合、大きな疑問が生ずることになる。それは彼ら、太郎とアヤ子がアダムとイブの体現なのか、それとも神の体現なのか、という相違である。多くの先行研究に従えば、彼らは神の体現者ということになってしま⁽²⁶⁾う。しかし、彼らはあくまで、アダムとイブの体現なのだ。

そのためには一度人間性の過程を経て、聖書から外れる必要があるのだ。そして人間性の過程を経るうえで重要な自殺であるが、より神、聖書に近づいていたのなら起こりえない出来事だと考えることができよう。もしその前提で論ずれば、当然自殺そのものの自体がすでに罪意識の産物であるため、内在化していた際には、より罪を重ねる状態にはならないはずである。罪を清算しよう⁽²⁷⁾と自殺を行うものが、その自殺を行うことによって更なる罪を生むのはありえないといえる。

そしてこの自殺の付与は、結果として彼らが神の権能を行使し、聖書において蛇に「神のように善悪を知る」と言われた知恵の果実を食べ、神の知識、権能に近づいたアダムとイブへの類似を示している。結果神の権能に近づいただけの彼らは、はじめからそれを有していたわけではなく、神の性質、体現にはなりえないのだ。



以上から『瓶詰地獄』の書簡内の地獄とは、これら堂々巡りにあるといえる。聖書に囚われている自身らの性質に気が付いた人間が、自己決定のための死を選ぶ。しかしそれすらも聖書的世界の枠組みの一つでしかなく、最後はアダムとイブの体現として聖書に回帰する。これらが書簡内の地獄である。(前頁の回を参照)

四 『瓶詰地獄』における「語り手」の性質

芥川龍之介『藪の中』との比較から

ここで「編集者」たる語り手について触れていく必要があるう。

『瓶詰地獄』を構成する、それらの書簡を精査する上で、語り手の存在を考えていく必要がある。まずはじめに考えるべきは、瓶の名称に関してである。

「第一の瓶」等の名称は誰が名付けたものであるのだろうか。端的に作者・夢野久作が名付け、そう配置したと読むこともできるだろうが、それは作者によるものではなく語り手によるものと考えるべきであり、そこには何かしらの要因があると捉えることができる。

注目したいのは、二番目以降の三つの書状には、「第一の瓶の内容」「第二の瓶の内容」「第三の瓶の内容」と表題が付けられていることである。(中略) この表題も「編集者」が掲げたものであると考えた方が自然ではないだろうか。一、二、三と順番が付されるから、読者は、三つの書状を同質のものとして受け取る。

そこにはこの瓶の順を配列した人物がいると考えられる。書簡を読み、配置した語り手、その人物こそが、『瓶詰地獄』という作品を構成する上での「編集者」である。

この「編集者」の概念は、たとえば芥川龍之介の『藪の中』(『新潮』一九三二年一月)にも存在する。『藪の中』には、『瓶詰地獄』と同様にその物語に決定不可能性が存在する。『藪の中』は当事者による告白の形をとり、それは『瓶詰地獄』と同様の性質である。ただし『藪の中』は検非違使への応答という性質もある。どちらにせよ、そこには語りの意図がある。ここでは、『藪の中』の語りを踏まえるために、菅原克也の『小説の仕組み 近代文学の「語り」と物語分析』(東京大学出版会 二〇一七年)を参照し、それをもとに『瓶詰地獄』の語りを考察する。

はじめに現れる「皮肉なる微笑」について言えば、多襄丸の面上に微笑が浮かぶという状況に対し、尋問を行う側が冷静でいられたとは考えにくい。検非違使たちの自然な反応を想像するなら「不逞なる微笑」といった表現になっているはずである。(中略)「皮肉なる微笑」という表現が、尋問の場の状況説明となっている以上、ここには多襄丸と検非違使たちとを等距離に見えようとする態度が感知される。同様に、次に表れる「陰鬱なる興奮」も対象との距離をふくんでいる。(中略)多襄丸がするように語ってみせる事のなりゆきに従って、多襄丸の外面に表れる興奮に「陰鬱なる」という色づけがなされるのである。検非違使たちに、あるいは何らかの立場で尋問に立ち会った証人に、そのような複雑な穿鑿

が可能であったとは考えにくい。同様に、「快活なる微笑」も「昂然たる態度」も、尋問の場に居あわせた人間たちの知覚のみに依存するとは考えられない。(中略) 処刑されるのは覚悟の上であると語る多襄丸の言葉に、検非違使たちへの挑戦の響きを聞きとることが出来る以上、この「昂然たる」という形容が検非違使たちの経験・意識に帰せられるとは考えられない。したがって、知覚の位置する場合こそ物語世界の内部にあるものの、それを語る場は、おのずから別のところにあるとすべきであろう。

検非違使への応答という性質の中で、『藪の中』の多襄丸の告白を、別の場で語る存在がしていることが明記されている。多襄丸と検非違使の関係の中で、告白に語り手の認識が表明されていることから、それを明らかにしている。

多襄丸の発話の流れからいって、とくに括弧の使用を必要としないのは、括弧を取り去ってしまっても自然な発話として十分に成立しうることから明かである。ただし、「陰鬱なる興奮」に駆られた多襄丸が語る事の次第において、もつとも緊迫した場面に差し掛かうとする際の発話であるという点を考えるなら、括弧内に挿入される情報で、発話の文脈を外れる性格を帯びるのも否めない。(中略) 多襄丸の口から発せられる形を取りはするものの、実質的には語り手が担う語りだと考えられるのだらう。それは、この「藪の中」という物語において、殺された男の胸元の傷と、その場に残された縄の一筋についての説明が三人各様に食い違う証言におい

て、きわめて重要な細部として浮上してくるにかかわる。(中略) ここには、残された縄について説明を加えておかななくてはならない語り手の側の要請との、一種の妥協がみられると考えられる。²⁸⁾

また、この語り手は『藪の中』という作品を構成する上での、重要な役割を担っている。この語り手の存在によって、『藪の中』で矛盾が生まれているのである。

この語り手は「編集者」として機能し、物語を構成している。同様の要素については作中で他にも見られる。告白する作中人物個々の語りに留まらず、語り手は作品全体に存在するのだ。

はじめの四人の証言が、検非違使の尋問への応答であって、その発話がほぼありのままに記録されるという体裁を取るのに対し、当事者である多襄丸、女(真砂)、死霊(その夫である金澤の武弘)らの語りは、尋問に対する応答という性格を脱して、語りとして自立する傾向を帯びる。また多襄丸の語りよりも女の語りが、女の語りよりも死霊の語りの自立性が高まるという、斬進的な傾向も認められる。(中略) アステリスクで区切られた前半と後半とでは発話の再現方法はつきりと変化するし、後半にあらわれる当事者三人の語りも、それぞれに異なる性格を帯びているからである。²⁹⁾

『藪の中』は語りに際して、アステリスクを用いて先の四人の目撃者・関係者と、後の三人の当事者の語りに差別化があるとし、さらに当事者の語りにも、後のものほど語りとして自立していく性質がある。

「清水寺に来れる女の懺悔」には、それまでの証言にみられなかった一つの特徴があらわれる。女の「懺悔」に発話の直接話法の再現がみられるのである。女の「懺悔」にあらわれる「かう云ひました。」「……」夫はこの言葉を聞いた時」といった語り口には、女に「懺悔」を自立した語りに仕立てようとする、語りの場の意図が働いている。それは、検非違使の尋問に応答する体裁をとる先の四人の証言の語りとは、本質的に異なる語りである。そのような、当事者の語りを自立した語りに仕立てようとする意図がさらに深まるのが、「巫女の口を借りたる死霊の物語」すなわち殺された夫の物語である。³⁰⁾

ここでの自立していく語りとは、応答などによる語りではなく直接的話法を用い、自身の中にかみ砕かれた体験として、自己を語っていく形にある。『藪の中』の語りは、発話者の体験を自身のものとして語ること、一種の正当性を生む効果を發揮しているのだ。また「編集者」たる語り手は、告白について文字で起こす際に、直接的話法を用いることによって、正当性を發揮させようとしているのである。

この『藪の中』の七つの語りに対する配列こそが「編集者」の存在を証明する所以である。

さて、以上のように『藪の中』の語り手の存在に触れたところで、『瓶詰地獄』における「編集者」の存在について詳しく述べていく。先に瓶の名称付けの問題を挙げ、「編集者」の存在について簡潔に述べたが、ここではその「編集者」の性質を精査して

いく。

この月日の空白と島の所在が伏せ字になっていること、これは情報を消去した目に見えない語り手がいることを示している。それが研究所の所員なのか、それとも所員を経由して作家や編集者に廻ったかはもとより不明であるものの、瓶の内容を見た上で「××島役場」からの手紙と三つの瓶の内容を配列した何者かがいなければ説明がつかないのだ。³¹⁾

改めて確認しておきたい要素として、『藪の中』と『瓶詰地獄』に共通する物語の決定不可能性を挙げておく。『藪の中』はそれぞれの語り、証言に矛盾が生じており物語の事実を再現することが不可能である。『瓶詰地獄』も同様に、書簡同士の中で矛盾が生じ整合性を図ることが難しい。

しかしながら、この両者には相違点も存在する。『藪の中』は先にまとめたように、語りに関しては、後のものほど語りの自立性を帯びる。語られる中身はともかく、語られ方に関しては一定の規則が存在している。『瓶詰地獄』をそのような観点で捉えた場合、最も語りの自立性を帯びていると云えるのは第二の瓶にあたる。直接的話法を用いて、自身の経験として他者に訴えかける要因を持つのは、第二の瓶（第三の書簡）が顕著である。

「ネエ。お兄様。あたし達二人のうち一人が、若し病気になるって死んだら、あとは、どうしたらいい、でせうネエ」（『瓶詰地獄』本文引用）

これに留まらず、太郎が神に対して救いを求める場面に関して、感嘆詞まで用い、直接的話法で再現している。つまり、後に

配列される文書ほど語りの自立性を帯びる『藪の中』に対して、相手への自己の経験の正当性を示す要素が意図をもって配列されていない『瓶詰地獄』という相違がある。

また重要な点として、それぞれの作品における告白の筆記者（便宜上、語り手と差別化のためこのように記す）の相違が挙げられる。『藪の中』は前述のように、発話者はその告白をする本人である。多襄丸の語りは多襄丸が発話し、死霊の語りさえもあくまで巫女の口を借りた死霊の発話である。『瓶詰地獄』においても、瓶の中の書簡の発話者は、太郎かアヤ子のどちらかである。しかし、その発話を記録する人物には差異がある。

『藪の中』では検非違使、もしくは先に述べたように作品の構成を行なった「編集者」であるのに対し、『瓶詰地獄』では、発話者本人に帰属している。つまり『藪の中』では発話の語り手と筆記の語り手が別であるのに対し、『瓶詰地獄』は、瓶の中の書簡に関しては発話、筆記ともに同一の語り手なのである。すなわち、瓶の中の書簡の文面に関しては「編集者」は介入していないのだ。

つまり各々の告白が記載された文書の配列に規則が存在するか否か、また「編集者」の存在と編集作業を行う観点に両作の相違がある。『藪の中』の編集においては、文面そのものに編集作業が入る。『瓶詰地獄』にはその編集過程は存在していない。ここに差異が生じていると言える。物語の決定不可能性と「編集者」の存在という概念は共通ながらも、編集の在り方について相違があるのだ。『瓶詰地獄』の編集者は、記述された内容それ自体を

構成しているわけではないのだ。

五 『瓶詰地獄』の「地獄」

ここまで本作「編集者」の性質を述べてきた。ではどのような人物であれば、この「編集者」になりえるだろうか。

確認すべきこととして、重要なのは、瓶の順番を第一から第三まで名付け、配列したものがいることである。そして、この配列の順番は、決して三人称のような神の視点を以って並べられたわけではないということだ。『瓶詰地獄』を構成する書簡の順番が前後したりする可能性がある以上、絶対の語りではなく、不確かな中でそれでも配列だけをした「編集者」が存在することを示唆しているのである。

このように考えれば、配列自体が、その人物の語りである以上、中身を精査するために開瓶した、と考えることもできる。海洋研究所宛の書簡の言を信頼するのであれば、あくまで瓶は封瓶のままであるというのが明確になる。つまり中身を閲覧することのできない××島役場の人物は、この「編集者」という語り手にはなり得ないはずである。

しかしながら、海洋研究所に送られるはずであった書簡は、日付の記載がないために実際には送られていないとする見方もある。

送られない理由は複数考えられるが、ある視点として、書簡との整合性を図った結果だと考えられる。何らかの形で開瓶が発生したために、「封瓶のまま」という書簡の本文が結果として嘘と

なり、整合性を失ったため、送付する書簡を再構成する必要があった。結果、以前のものは不要となり、日付を明記する必要もなく捨てられた可能性が存在する。こうなると開瓶を行なっているため、××島役場に関する人物が「編集者」となる可能性も考えられる。

第一から第三の瓶までの中身を語った人物と、第一から第三の瓶「である」ことを語った人物は別であり、それぞれが別の人格を有した人間である。前者は太郎とアヤ子で明確であるが、後者は明記がなく、どのような人物かも不確かである。しかし、瓶が配列された事実、そして多くの先行論で指摘される配列順への疑問視から、「神の視点」をもった存在ではないといえる。つまりこの場合は「編集者」は主観に基づき記述を行う語り手となんら変わらないことである。

開瓶の事実を明確にする等、書簡の整合性をとることは難しい。『瓶詰地獄』自体、物語の決定不可能性があるために、開瓶の有無については推測の域を出ない。しかし、前述のように瓶に名づけがなされていることは覆しようがない。そして整合性の取れない配列は、ただの一人格の語りと同様の性質であることを示しているのだ。つまり我々は、結局のところある一解釈者の語り手が配置した形を読んでいるに過ぎないのである。

先に××島役場が「編集者」になりえる可能性を述べたが、これに限らず、開瓶の可能性が生まれている以上、瓶の中の書簡の存在を知るもの誰もが「編集者」となり得よう。

ではさらにこの「編集者」の意図について触れていく。

『瓶詰地獄』は第一の書簡によって「編集者」の存在が分かり、それ故に順番があることに意味が生まれてくる。しかしながら太郎とアヤ子にとって真に問題とされるべきは瓶の中の書簡であることを忘れてはならない。

なぜ海洋研究所宛の書簡を編集者は置く必要があったのだろうか。確かに、最初の書簡によって、太郎とアヤ子の属さない本当の外部を置き、内部を相対化させ、より彼らの地獄を強調させる演出もあるだろう。しかし、それは「編集者」にとって意図する行為だったのだろうか。

もしそれを意図するのであれば、前述したような瓶に順番をつける必要はないはずである。結果として我々は、瓶の書簡の配列を再構成する必要があるため、それに至るまでの過程にある瓶の順番は不要であるはずだ。「編集者」は通常、編集行為自体の存在を読者に晒す必要はない。読者は、書簡を読めばその順について容易に考察することができる。時系列に再配置するのだ。しかし、『瓶詰地獄』の場合は再配置されるべき書簡に既に名前、順がつけられた結果、かえって疑問が生まれ物語の決定不可能性を生んでいる。そこにこそ「編集者」の存在が認識されるのだ。むしろ、「編集者」である事実を我々が見つけることのできる配列の仕方、書簡の配置、瓶の順番の明記は、「編集者」が、結果としてその地位を得たに過ぎず、「編集者」自身に編集意識は皆無であったことを示しているのではなからうか。仮に編集意識を持つているとすれば、読者が「編集者」の存在に気が付くような構成は不要なのだ。

そして実際に並べられている瓶の順番は、我々が解釈し物語を再構成する上で変更される。

語り手（配列者）は苦悩の手紙、悲痛な自戒、救助の声、それらを悲痛な一要素とし、いかにして並べれば効果的かを残酷な眼差しで見つめている。（中略）（ずれ）がもたらす解釈の多様性、書き手の意図を切り捨てることで生まれる物語、海により生じ内部から外部への（ずれ）の連鎖にとって構成された「瓶詰地獄」は、複数の始まりと終わりを想起させる反面として、読み手をも残酷な配列者へと変貌させる装置の可能性を秘めている。³⁰

小金沢透は読み手と同様、「編集者」も一解釈者として物語を作成する意図を孕んでいるとしている。しかし実際そうであろうか。

たとえば本文で言えば、そもそも海洋研究所宛の書簡を配置せず、瓶の中身のみを編集して置くことも可能であり、こちらのほうがより、「編集者」がいるという意識が生まれる可能性は低くなるはずだ。我々が、物語を構成する際に瓶の書簡を見る以上、「編集者」にとって重要なのは、瓶の中の存在であり瓶そのものにはない。封瓶という事実は海洋研究所宛の書簡の記述であるが、それも「編集者」の存在そのものによって否定される。その状況で「編集者」はあえて、海洋研究所宛の書簡を配置したのはなぜか。

この編集者は、真に物語を構成するものとしては言うなれば二流である。繰り返すが、そもそも「編集者」という役割の存在

を、考えさせうる配列など物語においては無駄である。つまり、自身の意識はなく、意図もないと読むことが可能だろう。何よりこの語り手である「編集者」が直接語ることはないが、ここまで「編集者」を想定させるのであれば、瓶に番号をつける以外にも、自身の語りを加えて差し支えないはずである。

ここから見えてくる事実は、結果として「編集者」の地位を与えられたこの人物は、なら、瓶の中身に興味が無いということである。先行論で多く指摘されている順序の問題についても、我々が考えた際、順に狂いを見出すのは、「編集者」の興味がなかったために起きることであると言ひ換えることも可能だ。太郎とアヤ子、彼らが自己の存在をかけて送りつけた瓶の内容に、一切目もくれず、あるいは潮流研究のためとして、形式的に瓶を配列し、結果、我々をして語り手に「編集者」の立場を与えたのである。潮流研究の一環として瓶自体の存在を語る際に、理解を促すため形式的な配列を行う必要に駆られ、海洋研究所宛の書簡を配置したと考えられるのである。そのような意味では、書簡の中身（物語）ではなく、瓶の存在そのものを意識した配列なのである。そこにこそ『藪の中』と同様、ある観点では配列の意図を見て取れるのだ。

先に聖書に囚われた太郎とアヤ子は聖書の規定する社会にのみ生き、人間社会で生きていくことができないことを述べた。聖書によって生きてきた人間は、その道にしか囚われず外に出ることができない。彼らは自身について思考し、到達するかすら定かではない外部に向けて書簡を出すに至った。

しかしながら明確なる外部としての、書簡の読み手、「編集者」や、海洋研究の人間などは、彼らの社会に大してなんら興味が無い。彼らが必死の覚悟で地獄だと述べた社会は、本当の外部の人々にとってはなんら関係がない存在なのである。

それは、個人が自己を培ってきた、所属する社会からは逃られないという事実と、そこに所属するわけではない他の外部社会の人々は、それになんら興味をもたないということでもある。即ち、人間個人は、他者が壮絶な考えの中で悶え苦しむことがあろうと、自身に影響しなければなんら興味をもたない、という人間の本質的な冷酷さを表しているのである。

六 おわりに

瓶を拾う体験から久作は、自身の興味を追求し探偵趣味と例えられるものによって『瓶詰地獄』を創作した。重要なのは、彼自身、自分の社会の中で瓶を捉えていることにある。そのために自分の興味を作品で示している。

メタ的に見れば、彼は書簡の中身を考えた人間であるが、彼自身の興味は最初に瓶を拾う体験から来ており、なおかつそこから至る興味は自己の社会に帰属している。これは筆者の推測であるが、もし仮に流れ着いた瓶に『瓶詰地獄』のような書簡が封瓶されていた場合、これまで考察したような書簡より瓶のほうが重要であることはないだろうか。しかし久作は自身の記述した書簡よりも、瓶に対して意識を置いている。自身の想像ではなく、瓶という現実の存在そのものに興味を抱いていることが考

察できるのだ。一般的に自己の社会に帰属するものに人間は興味を向ける。流れてきた瓶の存在は久作の社会に属しているのである。彼自身が瓶を拾い、魅入られたからこそ、結果として自身が作成した、中の書簡ではなくそれに至るまでの漂着物の瓶のほうが重要視されているのである。結果、書簡にはなんら興味のない、瓶のみに意味を見出す、書簡の地獄を排し自身に影響のないものには興味を抱かない、人間の本质が見えたのではないか。実際に彼にとって大きい存在は瓶であり、書簡ではないのだ。ここから書簡の中に人間の葛藤を描きそれを重いものとしながら、外部の人間は漂着した瓶のみに興味を向けるという、人間の他者興味への皆無を本質とした、本当の地獄が演出されたのである。

注

- (1) 伊藤里和「『瓶詰地獄』想像を孕む空隙」『夢想の深淵夢野久作論』（沖積舎、二〇一二年所収）においては、「久作自身意識図していない偶発的なものが含まれている可能性もあるにせよ、結果として内容全体の真偽を疑う余地を作り、一つの真相に到達し得ない決定不可能性を生じさせ、手紙と手紙の間に情報の欠落という空隙があることで本作の物語の創出は読者の手に委ねられている。それはまた、物語に予め用意されていない不確実な点、決定不可能性が含まれているということでもある。個別の事象の間にある空隙は、複数の物語の可能性あるいは不可能性を生みだし、一つの解答に辿りつかないよう攪乱する効果があるといえよう」と述べられている。

(2)

村上菜以「夢野久作『瓶詰の地獄』論 作り出される物語／解体される物語性」(二〇一五年「国文白百合」四六卷)においては、「すこし検討すれば、書記能力の発達は否定される。三つの書状が同一の書き手によって書かれたという前提が崩れ、読者は三つ合わせて物語を作り出すことに懐疑的になる。(中略)作品には、読者に作り出させた物語を、解体する仕掛けが用意されていた。この仕掛けは、物語を作り出すということと自体を対象化している。つまり、夢野にとって物語とは、自然に作り出されるものではなく、人為的に作り上げられるものだった。『瓶詰地獄』の主眼は、物語の不在性を告げることにある」と述べられている。

(3)

山根祥子「『瓶詰地獄』——瓶を投げ込む意味」(二〇一七年「九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会」二二号)は、「読者は瓶が拾われ、研究所宛てに送られたということとはわかって、そこでは第三者の感情はすべて排除され、事務的で機械じみた行為しか読み取ることはできない。(中略)この『瓶詰地獄』には手紙を書いた人物は存在する。第一の瓶から第三の瓶はもちろん、海洋研究所宛ての手紙もそれを書いた人物は確かにいる。しかし、それ以外の人物は「不在」なのである。三つの瓶が開封されたところにも書いていないし、研究所宛ての書簡もそれが研究所に届けられ、開封されたとは書いていない」と述べている。

(4)
小金沢透「夢野久作『瓶詰地獄』論〈ずれ〉るコミュニケーション、その配列」(二〇一〇年「中央大学国文」五

(5)

三号)においては、「手紙というコミュニケーション・ツールがテキストを構成しているのは象徴的であるといえるだろう。通常、書き手から読み手へと意思疎通のために送られる手紙は役目を果たすことなく、ただ『瓶詰地獄』というテキストを構成するためのみに存在しており、誤配送による〈ずれ〉は手紙の質そのものを変容させている。(中略)〈ずれ〉がもたらす解釈の多様性、書き手の意図を切り捨てることで生まれる物語、海により生じ内部から外部への〈ずれ〉の連鎖によって構成された『瓶詰地獄』は、複数の始まりと終わりを想起させる反面として、読み手をも残酷な配列者へと変貌させる装置の可能性を秘めている」と述べられている。

大島梢「聖書から読み解く『瓶詰地獄』」(二〇一七年「立教大学日本文学」一一〇巻)において、「太郎とアヤ子は無人島という閉鎖空間の中、全く同じ環境・同じ教育を得、接触を持つことのできる他人はお互いだけであった。そのような状況には拘わらず、二人は違う精神性や思考を抱くようになった。幼い頃に無人島に漂流した時には同一のものであったはずの彼らのアイデンティティは、成長と共に別のものとなり、それぞれが「個」を確立している。男女を異質として教える聖書と同じ道筋を二人は歩んでいる。(中略)それぞれが「個」を確立しているが、これらのことに本人たちは無自覚であり、自分たちは未だに同じものと認識している。肉体的な差は目で捉えることができるが、内面の違いは認識

できず、二人は知らず知らずのうちに乖離してしまっていた」と述べられている。

(6) 伊藤里和『「瓶詰地獄」漂流するユートピア』(二〇〇六年

「日本女子大学大学院文学研究科紀要」一三三号)において、

「ここでの「神様」は、モノである「聖書」と同一視される神であり、それ自身の言葉によって超越的な力を持つ神ではないのである。物質的に生活を助け、役立つ「聖書」と同列の、恣意的に利用される存在なのだ。(中略)彼らが求めているのは絶対的な法権力としての神ではなく、インセスタブールの罪悪感に対して、「み休徴」「お示し」といった、目に見える物質的な恩寵で応えてくれる神なのである。(中略)救助の目印にと立てた棒を棄てる場面のすぐ後にある。このことは、神との決別が古郷である文明社会との決別であることも示している。(中略)罪も罰も、事実上彼ら自身の選択意志にゆだねられている」としている。

(7) 前掲、注2に同じ。

(8) 前掲、注6に同じ。

(9) 前掲、注4に同じ。

(10) 前掲、注4に同じ。

(11) 前掲、注4に同じ。ここで述べる概念は小金沢透の考える、太郎とアヤ子のうちに想像された「内部内外部」と真の外部にあたる「内部外外部」による。

(12) 前掲、注4に同じ。

(13) 前掲、注6に同じ。

(14) 前掲、注3に同じ。

(15) 前掲、注3に同じ。

(16) 前掲、注5に同じ。

(17) 前掲、注5に同じ。

(18) 前掲、注5に同じ。

(19) 前掲、注5に同じ。

(20) 前掲、注5に同じ。

(21) 由良君美「自然状態と脳髓地獄」(一九七〇年五月「現代詩手帖」)

(22) 前掲、注4に同じ。

(23) 前掲、注5に同じ。

(24) 前掲、注20に同じ。

(25) 前掲、注5に同じ。

(26) 前掲、注2に同じ。

(27) 菅原克也『小説の仕組み近代文学の「語り」と物語分析』(二〇一七年四月、東京大学出版会)二一四―二一六頁

(28) 前掲、注26に同じ。二一七―二一八頁

(29) 前掲、注26に同じ。二二二頁

(30) 前掲、注26に同じ。二二八―二二九頁

(31) 前掲、注4に同じ。

(32) 前掲、注4に同じ。

(いわさわ・かずき 本学大学院修士課程)